

## ■今年の国語は！？

今年は外国文学の出題！ 確かな読解力と記述力が試される骨太の良問。

## ■出題形式

ここ数年、大問数は2問で、形式に大きな変化は見られない。（**1**物語文、**2**説明文）例年通り記述題の割合が高く、今年度（20年度）は物語文の記述問題の多くは字数指定がない。受験生の確かな記述力が試される質の高い問題と言えよう。近年は易化傾向が続いていたが、従来の難度に戻った印象。合格者平均点は68.4点(AL)、62.6点(CL)と依然高い。そのハードルをクリアするためには、記述問題で確実に得点することが不可欠である。

	2018年度	2019年度	2020年度
制限時間	50分	50分	50分
大問数	2問	2問	2問
小問数	15問	15問	15問
配点	100点	100点	100点
最高点	非公表	非公表	非公表
受験者平均点	64.1点	72.1点	59.7点
合格者平均点	75.2点(ADC) 65.5点(総合)	77.4点(ADC) 73.8点(総合)	68.4点(AL) 62.6点(CL)

※ ①(国・算・理の合計)×1.2 ②(国・理の合計)+算数×1.5

③国・算・理・社の合計(4科型選択者のみ)

①～③のうち、最も高いもので判定。

## ■出題内容

- 1** 物語文：『8つの物語—思い出の子どもたち』より『ローブ』フィリップ・ピアス 約6700字 あすなろ書房  
**2** 説明文：『食の実験場アメリカ』鈴木透 役3200字 中央公論新社

物語文では、状態を表す修飾語をあてはめる空欄補充題と文脈に沿った語句を漢字2字で本文中の空欄にあてはめる問題以外、すべて記述式問題になっている。内容説明の問題と心情把握の問題が指定字数無しでずらりと並ぶ。前書き（「ここまでのあらすじ」）なしの問題文を粘り強く読み込み、物語の中で登場人物の置かれた状況を正確に把握するのが最初のハードル。それが不十分だと後半の心情把握の記述題には手が付けられないだろう。しかも今年度の出題は外国文学である。日頃いかに本を読んでいるかが試される良問であった。入試対策としての「国語」という学習トレーニングも必要だが、それ以前に、日々言葉とどのように向き合っているかを問われる非常に高級な問題である。ちなみに外国文学の出題は'09年度入試（前期：『ライオンと歩いた少年』エリック・キャンベル さくまゆみこ訳／後期：『「ニッポン社会」入門』コリン・ジョイス 谷岡健彦訳）以来である。今後も様々な種類の文章の出題に備えたい。

説明文では、漢字の書き取り・内容把握の問題（25字以内の記述式問題・15字以内の記述式問題・選択式問題）・「対比・比較」の問題（指定字数無しの記述式問題）・文脈把握の問題（語句ぬき出し・空欄に自分で考えた語句を挿入する問題）・修飾語や接続語をあてはめる空欄補充題など、幅広い形式の小問が出題された。例年、**1**の物語文に比べて課題文も短く求められる記述のボリュームも少ないので（本年度に関しては**1**の課題文の分量は例年よりも短かった）、**2**を先に解いて得点の取りこぼしを防ぐのも得策であろう。

## ■合格に向けての対策

立命館の入試問題の大きな特徴は、文章が長いことと記述問題の数が多いことです。50分という制限時間内に、いかに速く正確に文脈を読み取り、どのように問題をしっかり処理するかという能力が問われます。物語文においては、登場人物の心情をおさえるだけでなく、心情や行動の理由まで読み取る力が重要です。

論説文では、指示語の示す内容や物事の理由など根拠を明確にして、「自分のことばで」まとめることができるようにトレーニングをしておくことが大切です。

記述問題に関しては、今後も字数指定の無い問題が出される可能性が高い学校です。対策としては、答えを書く前に、どの言葉とどの言葉を必ず入れるなどの構成を考え、必要な内容を必要な分だけしっかりと拾い集める力が重要です。また、記述力をつけるためには、書くことを嫌がらず、空白にせず、「まずは、書いてみる」という勇気を持つことが大切です。

これらの力を養うためには、毎月の『記述・表現課題』や記述問題に特化した演習講座テキスト、夏期講習会テキストに精力的に取り組むことが大切です。そして、それらのテキストに加えて「ショートテスト」や各種オプション授業などで多くの文章に触れ、それぞれの文章を確実に理解、復習しておくことでしっかりと読解力を身につけていきましょう。漢字に関しては、分量からいっても確実に点数を稼いでおきたいところなので、『中学入試 での順過去問漢字2610問』と合わせて、『かなめ②』の漢字・四字熟語の部分にもしっかりと取り組み、覚えておくことが大切です。

■今年の算数は！？

今年は一気に難化！6割なら確実に5割でも十分勝負になる！？

■出題形式

’04年度以降50分100点満点の大問5問という形式で実施されている。今年度(’20年度)も同様であった。**1**は計算問題4問。**2**が独立小問。昨年度(’19年度)5問に対して今年度は3問に減少。**3**は会話文形式、**4**以降は小問付きの大問という構成で、出題形式に変化が見て取れる。

過去4年間の平均点の推移、’17年度(表には無し)から今年度にかけての受験者全体平均点を比較すると、’18年度は’17年度と比較して大幅に易化、昨年度は’18年度と比較してやや難化といったところだが、今年度は’17年度と同程度レベルに平均点が低下している。ただし、今回の平均点低下は「問題の素材」による難化ではなく、「文字数の大幅な増加」によるもので、文字数の多さにより、戦意喪失した者が多く現れ、その結果として平均点が低下したと考えられる。受験生が、長い文章を目の当たりにしたときに「面倒くさいな。」と感じるか、「丁寧に書いてあるから、その通りに従って考えていけばよい。」と感じるかが結果として現れたものであろう。

■出題内容

**1** (1)~(4)四則計算    **2** (1)濃度    (2)平面図形    (3)場合の数    **3** 数列    **4** 仕事算    **5** 旅人算

**1** 計算問題4問。例年とほぼ同じレベルで決して難しくはない。全問正解したい。(2)(4)は分配法則を活用する問題。工夫して計算することを要求されている。**2** 小問の難易度は例年通り。(1)の濃度は平易(2)の平面図形も受験生なら一度は解いたことのある問題。(3)の場合の数も場合分けすることで正解できる。ここは全問正解したい。**3** 会話形式の数列の問題。会話形式で出題されるのは近年ではなかった。大学入試制度改革の影響によるものと思われる。問題の条件設定に注意して解答しないと、間違えてしまう。素材自体は、等差数列に関する問題で難易度も高くはないが、読解力(速く、正確な)がないと、得点しきれない。**4** 仕事算。ただし、時間とお金の両方を比べて調べるという、面倒な作業を求められる。**3** 同様問題自体は難しくないが作業が多いので、自分の出した答えが本当に正しいのか不安な受験生も多かったのではないかと。**5** 旅人算。小問が5問ある。(1)~(4)まで解答し、(5)は時間があれば解答できればよい。合格点を獲得するには要領よく立ち回る必要がある。難易度自体は決して高くはない。(1)が解けたら、(2)(3)を飛ばして(4)は答えられる。条件整理をして解答していくことで、確実に得点を積み重ねていくことを要求されている。

■合格に向けての対策

立命館は、立命館大学の意向もあるのか、大学での文献読破力につながるような読破力を受験生に課する傾向が元々強い学校です。それゆえ、通り一遍の入試問題とは違い、「自分で条件を整理して答えを出す。」という作業を丁寧にすることを要求する問題が他校よりも多く見られます。この傾向が、近年の公立中高一貫校を筆頭とする適性検査の傾向と融合し、今年度のような入試になったと考えられます。それ故に、問題を解いていく上で予想を上回る文字数と作業量であり、試験終了時に、その手応えの悪さに恐怖を感じた受験生も多かったのではないかと考えられます。そして、この傾向は今後継続する可能性が十分にあります。来年度(’21年度)以降も今年度と同じような傾向であるならば、合格者平均点の低さ等を考慮した上で、前半部分の計算や小問を取りこぼすことなく確実に正解し、後半の長文問題は読めばできるという問題を的確にピックアップし、正解することが合格の鍵となるでしょう。

対策としては、まず、6年テキストのステップA、ステップBレベルを反復練習しましょう。次に、**3**のような会話文形式の問題にも入試問題演習等を通じて慣れていきましょう。この圧倒的に多い文字数と作業量に対する試験時間を考えると、なかなか厳しいものであることは間違いありません。ただし、今年度も例年通り、成基学園のテキストをやりこなしてきた受験生にとっては、なじみのあるであろう問題も多く出題されています。時間のかかりそうな問題やすぐに対処しにくい問題は後回しにし、戦意喪失することなく最後の大問まで辿りつくことを意識した時間配分の訓練が必要です。したがって、過去問を演習する際は「面倒な問題・条件の多い問題を時間内に整理して解く。」ことを念頭に置いて取り組む必要があります。

また、出題分野が幅広いことから、典型的な入試問題をこなしていくことが肝要です。過去問演習はあくまでも時間配分の訓練の為に実施するものであると留意してください。なお、立方体の問題やグラフの問題は、過去に何度も出題されているので、グラフを読み取る力だけでなく、自分でかいて考える力も養ってほしいところです。

	2018年度	2019年度	2020年度
制限時間	50分	50分	50分
大問数	5問	5問	5問
小問数	17問	19問	23問
配点	100点	100点	100点
最高点	非公表	非公表	非公表
受験者平均点	68.9点	64.3点	43.1点
合格者平均点	81.3点(ADC) 74.7点(総合)	72.0点(ADC) 65.4点(総合)	57.4点(AL) 49.1点(CL)

※ ①(国・算・理の合計)×1.2    ②(国・理の合計)+算数×1.5  
 ③国・算・理・社の合計(4科型選抜者のみ)  
 ①~③のうち、最も高いもので判定。

## ■今年の理科は！？

「短いリード文の乱発」に、理解力・分析力・思考力をもとめる理科担当者の心が見える。

## ■出題形式

例年通り、大問は4問。物化生地から1問ずつの構成である。小問数は減少傾向だが、その分、記述問題や計算問題が増加している。このため、問題全体の作業量や難度は昨年度（'19年度）よりむしろ上がったような印象を受ける。今年度（'20年度）の50点満点中、合格者平均点がAL（旧ADC）25.5点、CL（旧総合）22.0点であることがその表れである。

	2018年度	2019年度	2020年度
制限時間	40分	40分	40分
大問数	4問	4問	4問
小問数	36問	32問	30問
配点	50点	50点	50点
最高点	非公表	非公表	非公表
受験者平均点	37.4点	32.0点	20.7点
合格者平均点	41.8点(ADC) 37.9点(総合)	36.1点(ADC) 32.1点(総合)	25.5点(AL) 22.0点(CL)

※ ①（国・算・理の合計）×1.2 ②（国・理の合計）+算数×1.5

③ 国・算・理・社の合計（4科型選択者のみ）

①～③のうち、最も高いもので判定。

また、出題の内容で注目しておきたいのは、リード文の形式の変化である。昨年度までは1ページにも及ぶ長

文を読み、その後小問に取り組み形式であったが、今年度は短めのリード文が複数用意されている形式に変わった。この変化は、過年度までの「国語的読み取りの力」を重視した傾向ではなく、「データの読解とそれを理解する力」や「与えられた情報から考察・分析する力」を重視する傾向にシフトした結果と考えられる。

## ■出題内容

- 〔1〕生物 植物の生態
- 〔2〕化学 食塩水の濃度
- 〔3〕物理 光の反射と屈折
- 〔4〕地学 月の見え方

〔1〕 植物の生態についての問題。根、茎、葉、子葉の構造と、花芽の形成と暗期の関係を問う問題が出題されている。環状除皮の処理について知っているとかかなり有利になる。

〔2〕 食塩水の濃度に関する問題。単純な計算問題ではなく、沸点や凝固点の変化や、海水から食塩を取り出す実験からめた思考問題になっている。日頃やっている計算について、理論を理解して行っているのかが問われる仕組みになっている。立命館で定番の記述問題も3問出題されている。

〔3〕 光の反射や屈折についての問題。大半が凸レンズによる光の屈折についての問題である。凸レンズによる光の屈折と像のでき方は6年生で学習する内容で、スーパーノートに類題が掲載されている。

〔4〕 月の満ち欠け、日食と月食、月の大きさについての問題。月の問題といえば暗記中心で得点源となる学校が多い中で、今年度は一筋縄ではいけない問題を複数見かけた。特に最後の1問、「月の大きさを調べるのに、ピンポン玉と比の知識をどう使うか？」という問題は、5年生で学習した「地球から見た月と太陽の大きさがほぼ同じになることの理由」を応用することに気付けるのかがカギとなる。

## ■合格に向けての対策

物化生地からバランスよく出題されるので、まず通常授業で扱われる全範囲の知識をきちんと習得してください。多岐にわたる出題内容に対応するためにも、弱点分野や苦手分野はつくらないようにすべきです。高難度な立命館中学校の問題に対応するには、考えの材料となる基本知識をマスターして試験会場に行くことが必要不可欠です。ただし、丸暗記だけで太刀打ちできるような問題を出す学校ではありません。自身の持つ知識とあたえられた情報を統合して結論を出すことが必要になるので、常に「なぜこうなる？」「この文章・公式の意味は？」を意識しながら学習を進めてください。

その上で、立命館中学の傾向として、次の2点に注意してください。

まず、「リード文を読んで解く問題」の存在。過去には1ページをこえる長いリード文が出されたこともありますが、今年度は短いリード文を複数出すスタイルになっています。いずれにせよ、「リード文から読み取り、自分の頭でもうひと頑張り（内容整理）」できる力が求められます。文章から得られる情報をきっちりと分析する力が必要になるので、メモを取るなどの対策を普段の模試でも意識して行ってください。

もう一つが「記述解答問題」の対策。これに関しては、とにかく書くことが大切です。記述を書く→メンター（講師）のチェックを受ける→改めて書き直す、という作業を繰り返して記述力を身に着けるしかありません。どんどん文章を書き、その都度間違いを指摘してもらい、直すことを繰り返さなければ記述力は身につかないので、間違いを恐れずどんどんチャレンジしてください。

## ■今年の社会は！？

ちょっと難化したけど、正確な知識を持って、社会を得意にしておけば立命館に合格できます！

## ■出題形式

大問数は3問で、'18年度の数にもどった。大問数3問～4問が既定数というところであろうか。小問数は46問で4年連続同数。しかし、出題内容に変化があった。昨年度（'19年度）と比較すると、選択解答30問→19問に、用語解答14問→27問に、文章記述解答2問→出題されず。用語解答が昨年度より大きく増加し、記号選択解答が減少、そして立命館の入試の特徴であった文章記述解答が無くなった。'12年以来続いていた文章記述解答が無くなったのは大きな変化だが、上述したように用語解答が増加、記号選択が減少したことから、“書かせる入試”の立命館にやや回帰した。

	2018年度	2019年度	2020年度
制限時間	40分	40分	40分
大問数	3問	4問	3問
小問数	46問	46問	46問
配点	50	50	50
最高点	非公表	非公表	非公表
受験者平均点	36.3点	36.5点	30.1点
合格者平均点	38.8点(ADC) 37.3点(総合)	39.3点(ADC) 36.4点(総合)	32.4点(AL) 32.3点(CL)

※ ①(国・算・理の合計)×1.2 ②(国・理の合計)+算数×1.5

③国・算・理・社の合計(4科型選択者のみ)

①～③のうち、最も高いもので判定。

## ■出題内容

- ① <地理> 関東地方、日本と世界の関係について（地理総合問題）
- ② <歴史> 日本の裁判制度・政治制度・法制についての歴史（歴史通史の総合問題）
- ③ <政治> 日本の国会と選挙制度について（政治総合問題）

① 大問の①は、例年日本の地形・日本の地理を中心とした問題で、今年は関東地方についての地理総合問題であった。それに加えて日本と世界の関係、世界のような出題された。東京都と同緯度の国（イラン）、世界の人口・食料自給率、日本とドイツ・フィリピン・アラブ首長国連邦との貿易のようす、非政府組織（NGO）などの基本事項が出題。立命館では“世界遺産”がよく出題されており、今年も「富岡製糸場」が問われた。ほとんどが基礎知識を問う出題群ではあったが、群馬県に出稼ぎのために多く居住するブラジル人、中国西部の少数民族ウイグル族、モンゴルの伝統的住居「ゲル」を書かせる出題は、中学校社会科レベルの内容で難問であった。なお、「日本の地形・施設」（今年は“九十九里平野”を問う難問も）の出題は立命館必出！

② 日本の裁判や政治の制度・法などについての歴史総合問題。卑弥呼（漢字）、大宝律令、荘園（漢字）一所懸命、建武の新政、分国法、伊藤博文が憲法を学ぶために留学した国（ドイツ）などの基本知識や用語の出題で、昨年度から出題されるようになった漢字指定用語が定着しつつある。おおむね基本的な出題であるがゆえに、ここで取りこぼしが無いよう気をつける必要がある。

③ 日本の国会と選挙制度に関連した政治総合問題。立命館は、毎年ややクセが強い政治問題を出してきた。今年は参議院議員の定数が2018年の選挙法改正で何名となったか（242名→248名）を意識した出題があったのが特徴的。あとは“一票の格差（重み）”を問う問題など基本的だが時流に即した知識が問われている。立命館の社会は数問の難問が出題されるが、今年は昨年度までに比べてやや増加傾向にある。

## ■合格に向けての対策

今年度（'20年度）、立命館の入試で必出だった文章記述解答の出題が無くなりましたが、来年度（'21年度）からも出題されないという保証はありません。やはり文章記述対策はしっかり経験を積んでおくことが大切です。実際、今年度の後期入試では、文章記述解答が3問出題されていました。立命館の社会は基本的な知識で解ける問題が多く出題されています。よって、AL（旧アドバンス）コース志望なら8割以上、CL（旧総合）コースなら7割を取ることを目指すべきです。社会の配点が低いにもかかわらず、例年4科入試で、社会が高得点の受験生の合格率が高くなっています。立命館合格への近道は、社会科を得意にすることです。

出題内容は、ほとんどが学園のテキスト『古今東西』などの内容で対応可能となっています。したがって、日頃の授業やテストの復習を丁寧にすることがもっとも大切です。地理は『日本のすがた』等のグラフや雨温図などの特徴を分析、地図で地名の位置を確認するなどの努力を続けること。来年度は復活するかもしれない文章記述対策は、“事象の理由”を聞くことが多いので、記憶だけでなく、その成りたちや原因を学んでおいてください。また、一部難問も出題されるので、幅広い知識を身につけることも肝要です。